

2017 新ルール講習会

平成 29 年 4 月 16 日 (日) 13:00~

会 場 : 八代工業高等学校

講 師 : 伊東 隆(湧心館高等学校教諭)
東 祐治(熊本県警柔道師範)

国際柔道連盟試合審判規定 (2017～2020)

改定の要点①

採用される審判規定については、1月にアゼルバイジャンのバクーで開催された審判・コーチングセミナーで発表された。

各国の柔道家、コーチ、ファン、メディアはIJFユーチューブチャンネル(WWW.youtube.com/judo)において1月6日、7日よりバクーのセミナーを見ることができる。

改定の要点②

IJFはこれらの改定について、全体的なルールの流れは変えていないと宣言している。

また、テストマッチとして8月の世界選手権(ブタペスト)及びその他の国際大会(ローカル的な大会も含む)を視て10月に正式な決定を下すと言っている。

◎改定点

試合時間

※男女共に試合時間を4分(旧ルール・・・男子5分、女子4分)とする。

これは、IOCが男女の公平性を求めていること、ならびにオリンピックにおける男女混成団体戦で試合時間を統一するためである。

スコアについて

※スコアは、「一本」と「技あり」のみとする。

「技あり」には今までの「有効」も含まれる。

「技あり」2つでも「一本」と同等とはしない。

(合わせ技一本の廃止)

すなわち、例として「技あり」2対「技あり」3というケースもありうる。

※今回の改定で「技あり」の幅が旧ルールの「有効」の幅よりもかなり広がっており、今までの「一本」にかなり近い「技あり」と、やっと「有効」になったくらいの技の評価が同じになり、「有効」レベルの「技あり」2つを奪った選手と「一本」近い「技あり」を1つ奪った選手では前者の方が勝ちとなる。

また、「一本」か「技あり」という評価しかないので、1月から行われた3つの国際大会ではなかなか、「一本」が出にくい感じがしたと関係者の弁である。

抑え込み時間について

※10秒で「技あり」、20秒で「一本」とする。

旧ルール・・・10秒で「有効」
15秒で「技あり」
20秒で「一本」

試合の決着について

- ※規定試合時間(4分)において、試合は「技あり」もしくは「一本」のテクニカルスコアのみで決着がつくこととする。
- ※「反則負け」(直接もしくは累計による)を除き、「指導」(1回目、2回目)違いだけでは勝者を決しない。
- ※本戦では「指導」は相手のスコアとはならない。

ゴールデンスコアについて①

※本戦の試合時間が終了した時点で、両者に「技あり」のスコアがなく、もしくは「技あり」のスコアが同等の場合、「指導」の有無にかかわらず、その試合はゴールデンスコアに突入する。

※ゴールデンスコアに入る前の本戦時間内に与えられたスコア並びに罰則は引き続きスコアボードに反映される。

ゴールデンスコアについて②

※スコア(「技あり」「一本」)が与えられた時点でゴールデンスコアは直ちに終了となりスコアが与えられた選手が勝ちとなる。

※ゴールデンスコア中に「指導」が与えられた場合、与えられた選手が相手より多くの「指導」を受けたことになる場合、その試合は多くの「指導」を受けた選手が負けとなり、ゴールデンスコアは終了する。

ゴールデンスコアについて③

※試合展開例 I

本戦で青が「指導」2回を受け、白が0で本戦終了した場合、そのままゴールデンスコアに突入する。

ゴールデンスコアで白が「指導」1回目を受けた、まだ終了ではなく、その後また白が「指導」2回目を受けた、それでもまだ終了ではなく、この後どちらかがスコア（「技あり」「一本」）もしくは3回目の「指導」を受け「反則負け」にならない限りゴールデンスコアは続行する。

ゴールデンスコアについて④

※試合展開例Ⅱ

本戦で青が「指導」1回を受け、白が0で本戦終了した場合、そのままゴールデンスコアに突入する。

ゴールデンスコアで両者が「指導」を受け、「指導」の累計が2対1となり白の勝ちで終了する。

※試合展開例Ⅲ

白が「指導」2回を受け本戦終了、ゴールデンスコアに突入し白が「技あり」を奪った、白の逆転勝ちとなる。

※その他、様々な展開が予測されるので審判員はそのような試合展開を含んでジャッジしなければならない。



 **WHITE**

IJF **0**

IJF **0**

 **BLUE**

-81 kg **0:00**

 **WHITE**

IJF **1**

IJF **0**

 **BLUE**

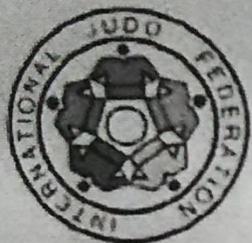
 **-81 kg** **1:24**

(試合終了)ゴールデンスコア突入 ->

勝者 白

4分終了時に白、青の両選手にスコアがない、ならびに指導がない(もしくは指導数が同じ)場合

→ ゴールデンスコアにおいて最初にスコアを獲得した選手の勝ちとなる



IJF Referee & Coach Seminar

 **WHITE**

IJF 0

IJF 0

 **BLUE**

-81 kg 0:00

 **WHITE**

IJF 0

IJF 0 

 **BLUE**

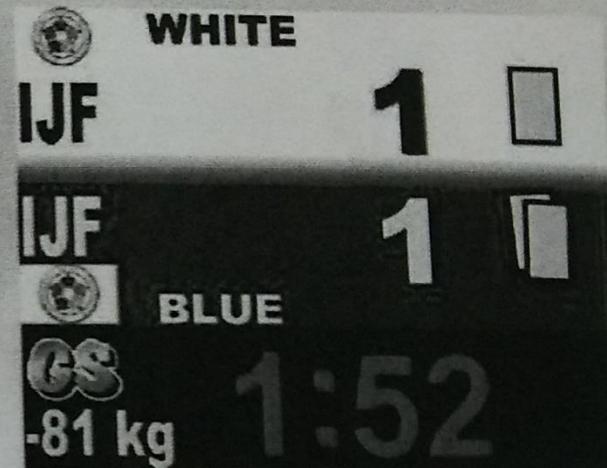
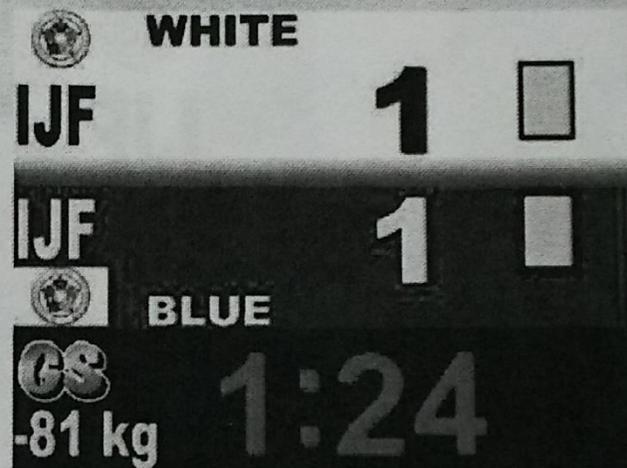
 **-81 kg 1:24**

(試合終了)ゴールデンスコア突入 ->

勝者 白



IJF Referee & Coach Seminar



(試合終了)ゴールデンスコア突入 ->

試合継続

->

白の勝ち

4分終了時に白、青の両選手が同スコア、白に指導1が与えられている場合

- ゴールデンスコアで最初に青が指導を受けた場合、両選手が指導1で並ぶので試合は継続される
- ゴールデンスコアで最初に白が指導を受けた場合、白の負けとなる
- ゴールデンスコアで両者に同時に指導が与えられた場合も、白の負けとなる

→両選手が指導1で並んだ後、次にペナルティが与えられた場合、与えられた選手の負けとなる

罰則について

- ①「指導」は4ではなく、「指導」3で「反則負け」となる。
- ②審判の作法や審判への理解を明確にするために、過去に柔道衣の握り方で罰則が与えられた袖口、ピストルグリップ、ポケットグリップなどの組み手について、今後は罰則を与えない。
(クロスグリップや標準的でない組み方・片襟等も)

注意事項

前頁の握り方、組み方について罰則を与えないというのは、その組み手が「攻撃準備動作」と見なされればよい。

がしかし、「攻撃準備動作」であれば何でもいいのではなく、過去に「指導」を受けていた柔道衣の握り方及び組み方をダミーにして時間稼ぎ、および防御、偽装技を施している選手に対しては、それを見抜いて審判員は「指導」を与えなければならない。

その際のジェスチャーはブロック、偽装行為、消極的等々が適当であろう。

組み方について

- I・標準でない組み方の場合、直ちに攻撃しなければ「指導」が与えられる。
- II・ベアハグ（投げるために相手に抱きつく行為）を行う場合は、攻撃する選手が少なくとも片方の組み手を持っていなければならない。組み手のない状態において両手で相手に抱きつく行為には「指導」が与えられる。
柔道衣に触れただけでは組んでいるとはみなさない。
ベアハグはしっかりと柔道衣を握っていることが条件である。

組み方について

- Ⅲ・相手の袖口の中に指を入れる行為は、今まで通り罰則(「指導」)を与える。
- Ⅳ・攻撃をしようとしなない、防御姿勢など柔道精神に反する消極的な行為に対しては厳しく「指導」が与えられる。
- Ⅴ・投げ技を準備するのに時間がかかることもあるため、組んでから攻撃を施すまでの時間を45秒に延長し、それまでに技が出ない場合は「指導」を与える。

※これに関しては試合の流れというものがあるので、組み合って技が今にも出そうな張り詰めた試合等に関しては少し長く見てもいい、また全くダラダラしてお互い技を出さない試合等には早めの「指導」もいいのでは。

45秒というのはあくまでも目安であって決められているものではないと解釈したほうがよい。45秒は忘れたほうがよく、少し長くなったと思えばよい。

組み方について

VI・脚を掴む行為や下穿きを握る行為については1回目は「指導」が与えられ、2回目は「反則負け」が与えられる。

（これまでは一発「反則負け」）

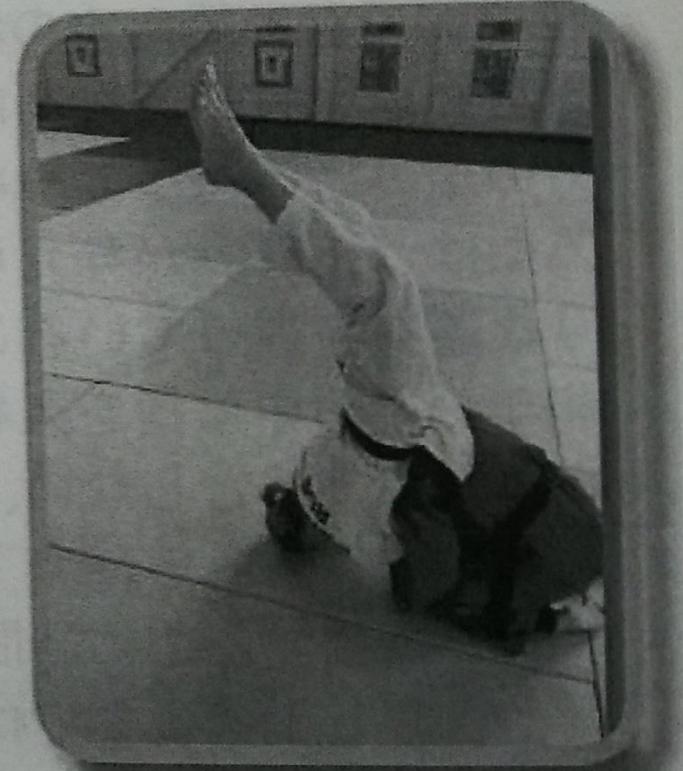
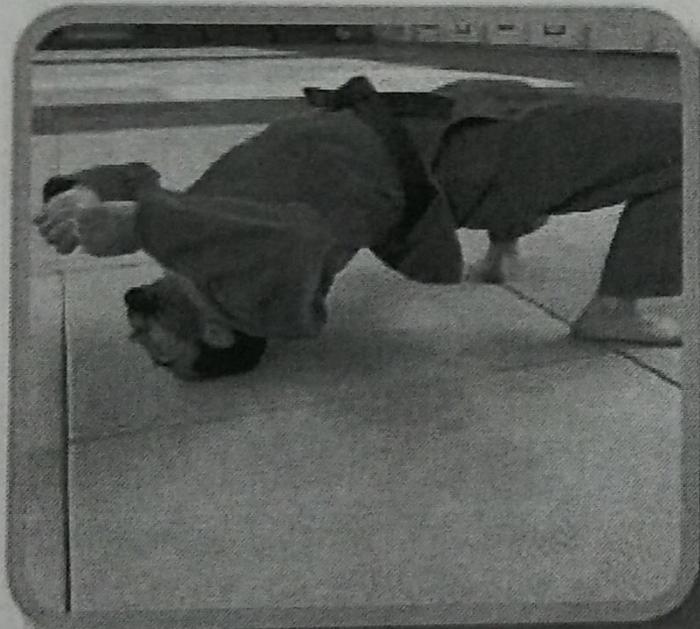
この「指導」に関しては他の「指導」とも累積されるので別の罰則と考えるほうが良い。

とにかく一つの試合で2回、この指導を与えられると「反則負け」と考えたほうが良い。

安全性について

- I・柔道精神に反するような行為(相手に怪我を負わせるような行為)は直ちに罰せられる。「反則負け」
- II・IJFでは可能な限り外傷事例を抑えるため、安全性に関する規定を精査してきた。
投げられる選手が背中から着地するのを避けるために行う試みについて、頭や首、脊椎を危険にさらす行為があれば「反則負け」が与えられる。
選手が「一本」を避けるために故意にブリッジの体勢になった場合、主審は今までのように「一本」を宣告するのではなく、ブリッジの体勢で着地した選手に対して「反則負け」を宣告する。

選手が「一本」を避けるために故意にブリッジの体勢になった場合、主審は今までのように「一本」を宣告するのではなく、ブリッジの体勢で着地した選手に対して「反則負け」を与える。



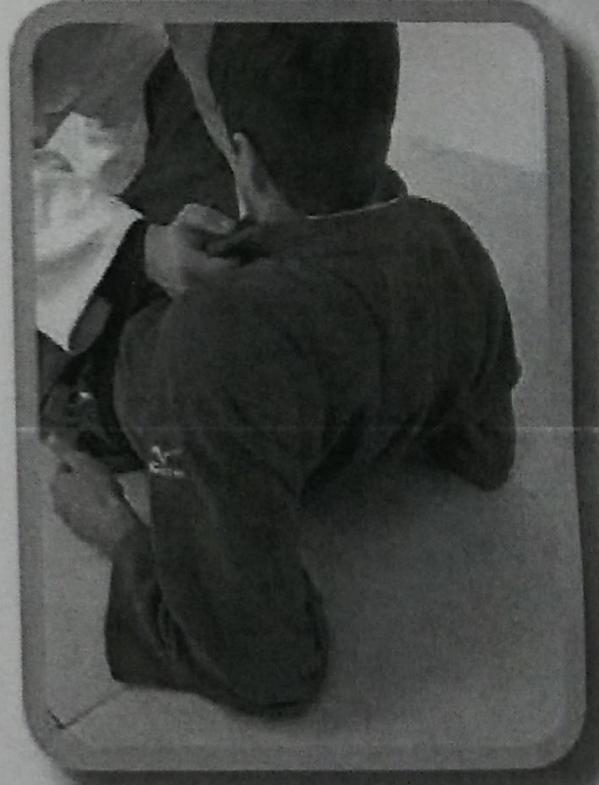
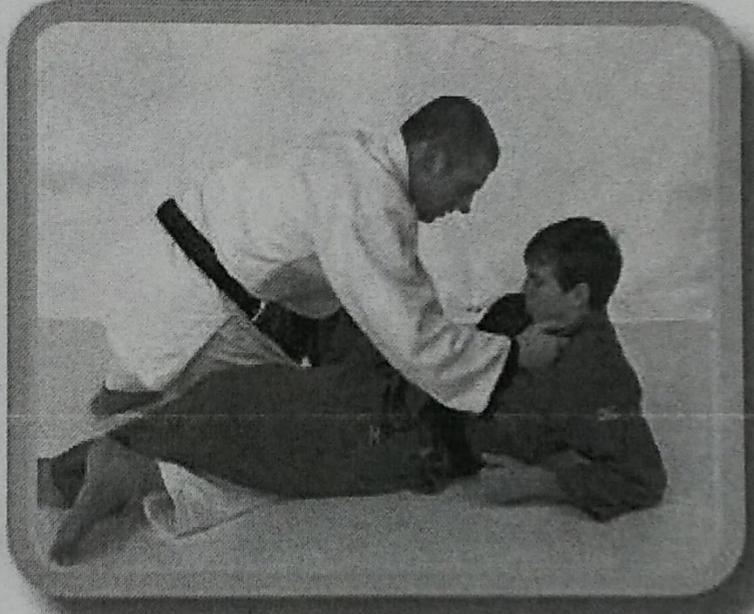
ただし、これにより敗退した選手は、その後の一連の試合（団体戦、敗者戦、3位決定戦等）には出場することができる。

ただし、これにより敗退した選手は、その後に試合（敗者復活戦や3位決定戦）があれば出

Ⅱ・後方に倒す技を掛けられ投げられる選手が、背中が着くのを避けるために、両肘を着いて逃れようとする状態。

若い柔道家に悪い例を見せないようにするために、両肘を着いた場合には技の効力を認め「技あり」を与えることができる。

また、片肘を着いて着地した場合には技の効力を認めずスコアとしての評価を行わない。



投げ技と返し技（後の先 先の先）

- I・A選手の攻撃に対してB選手が返し技を施した場合、自身の体が先に着地した選手が投げられたこととする。
- II・スコアを与えるに値する場合、適切なスコアが与えられる。
- III・両選手が同時に着地した場合は、双方にスコアを与えない。
- IV・着地した後に選手が施した技（返し技等）については、スコアの対象とはしない。（時間差を見る）
- V・着地後のいかなる行為も寝技（寝姿勢）とみなす。

柔道衣について

- I・より効率的に、より良い組み手で組むことができるように、柔道衣の上衣はきつく縛った状態の帯の中に収まっていなければならない。
さらに選手は主審が「待て」を宣告してから「はじめ」を宣告するまでの間に、上衣と帯を素早く正すこと基本としなければならない。
- II・仮に選手が時間稼ぎの目的で柔道衣もしくは帯を乱した場合は「指導」を与える。

ダブルパンチについて

基本的にダブルパンチはまずいという見解ですが、下肢への反則とベアハグのみは存在する。

昨年の全の本決勝で「技あり」を取られたk選手に同時に消極的の「指導」が与えられたケースについては「技あり」を取られる直前に両副審が反則のジャッジをしていたのでやむおえなかった。

が、取るんであれば「技あり」ジェスチャーの後に「まで」「始め」それからジャッジをした方が周りからのクレームが起こらないであろう。

ダブルパンチと寝技について①

- I・例として、下肢の反則と同時に反則された側が投げ技を施し「技あり」を取って抑え込んだ、主審は「技あり」「抑え込み」と宣告した後に下肢の反則のジェスチャーをし「指導」を投げられた側に宣告する。(下肢とベアハグのみ)
- II・そのあと抑えられた側がテッポウで返して抑え込んだ、これは反則のアドバンテージがあるので「解けた」「待て」で抑え込みの評価をする。
- III・反則のアドバンテージがなく、この場所が場外であっても寝技は継続し、「解けた」「抑え込み」である。

ダブルパンチと寝技について②

V・①→Ⅱの場面でありえないことですが中学の低学年あたりでは現実におこっていることです、抑えられている側が絞め技及び関節技を施し抑えている側がたまらず「参った」及び落ちた場合についてはIJFでどうするか検討中である。

理由はアドバンテージのある選手が抑えられてテッポウで返したら「解けた」「待て」ですのでこのケースで絞められて落ちた選手に活法を施してまた戦わせるのか関節技で脱臼した選手などはどうなるのかとか意見が飛び交ってます。

(非常に稀なケース)

ゴールデンスコアと寝技について

- I・ゴールデンスコアに入り、場内外において、抑え込みが成立した場合、10秒過ぎてまだ抑え込みが解けてない状態のときに抑えられている側がテッポウで返して抑え込んだ、処置は「解けた」「それまで」である。
- II・ゴールデンスコアに入り、場内外において、抑え込みが成立した場合、10秒過ぎてまだ抑え込みが解けてない状態のときに抑えられている選手が絞め技か関節技を施し、抑えている選手が「参った」または落ちた、処置は「一本」「それまで」で抑えられながら絞め技、関節技を施した選手の勝ちとなる。

ゴールデンスコアと寝技について

- Ⅲ・前頁のⅡについてはゴールデンスコアなので抑えている選手は10秒過ぎて抑え込みを解けば「技あり」のスコアが与えられ勝ちとなるが、「一本」まで抑え込みにいけば、その抑え込み時間は試合時間内と見なされるため、試合時間内での絞め技、関節技が評価される。
- Ⅳ・試合時間4分で3分55秒で抑え込みが成立、終了時間は過ぎても抑え込み時間は延長されるので、その間にテッポウで返して抑え込んだら「解けた」「それまで」ある。
が、抑えられてる選手が下から絞め技、関節技を施し、それで抑え込んでる選手が「参った」か落ちれば絞め技、関節技を施した選手が勝ちとなる。

両者「反則負け」について①

※4月2日に行われた全日本選抜体重別選手権大会の57kg級一回戦で玉置桃対小野彰子戦で起こった両者「反則負け」で2名とも準決勝に上がれなかった。

国際審判規定では基本的に両者「反則負け」は2名とも次の試合には進出できないことになっており、あまり大きな大会で見ない結果なので我々は知っていても無関心である。

都道府県の大会では暗黙の了解で申し合わせ事項としてリセットしてゴールデンスコアだったり再試合だったり、15年ぐらい前は高体連の試合では抽選という申し合わせもあった。

両者「反則負け」について②

※記憶するに、過去平成6年の全日本選抜体重別選手権95kg超級（当時）で準決勝戦で小川直也と金野潤が両者「反則負け」となり、2人とも決勝に上がれず（当時はGSはなかった）、増地克之が不戦勝で優勝した事例があり、増地はその翌年も優勝し2連覇を飾った。県内では、平成16年高校総体女子78kg超級決勝の熊本西高校同志の対戦で本戦4分内で消極的が累計され両者「反則負け」があったが、規定通りリセットして当時のルールで4分間のゴールデンスコアを行ったことがある。

両者「反則負け」について②

※今回の両者「反則負け」は高体連や中体連に大きな混乱を及ぼしており、実際に「指導」3で「反則負け」で、本戦の罰則はゴールデンスコアに持ち超すので累計の両者「反則負け」はありうる現状になりました。

現在の高体連、中体連の申し合わせはリセットしてゴールデンスコアで勝敗を決するとなっていたと思いますが、暗黙の了解であったため、審判会議ではなかなか話題にならないものでした。

そのため我々は基本を忘れがちになり、事が起こると目が覚めるといふ具合に、もう一度申し合わせ等を再確認するようになるわけです。

両者「反則負け」について③

※高体連事務局に問い合わせた回答は、正式には表彰に係る試合(準決勝以上3位決定まで)は再試合、それ以外は特に決めてなく、事例等がないので混乱しているそうです。

全国専門部長が今年度交代で4月14日に引き継ぎ会議をもつということで後日、新しい回答が来るそうです。

3月まで専門部長を務め退任する全柔連審判委員の福岡の保坂慶蔵氏によりますと都道府県予選は本大会に準じますが代表を決める大切な試合なので、今まで通り勝者をGSで決める等々、県内の事情で申し合わせして結構だということです。

特に女子はエントリーが減少していて支障が発生しそうな感じがします。

両者「反則負け」について④

※今までもこの件について、国際大会(ローカル大会)で優勝者なし(決勝戦で両者「反則負け」で)という事例も出ています。

それで海外の審判員の多くはゴールデンスコアにおいて最後の「指導」を出す場合、両者緊迫していたら流れや動き、前に出てるか出てないか等々、僅かでも有利な面を見つけて片方にジャッジするそうです。

海外の審判員はペーパー試験等で免許を取ったような柔道家が多く、やっても素人まがりの方が多く、ルール通り(例・ブリッジで首で支えたかとか)精密機械のように取っていくそうです。

新ルールへの審判委員会の対応

※審判委員会は、1月30日に行われた会議で対応が決まったそうです。

個人はそのまま(全日本や選抜などを除く、国内の大会等への対応)で、団体戦は「指導」2差を勝敗の基準とし、それ以外は引き分け。

代表選は引き分けの試合を抽選でとありますが、守るべき伝統を守り、任意の代表戦で戦わせるようにしてあります。

反則関係は、組み手争い際の袖口、ピストルグリップ、ポケットグリップ、クロスグリップが攻撃準備動作であればOKとなりましたが、ルールが変わった訳ではなく長時間持ち続けると別の罰則(ブロック、偽装行為等)で取られます。

直ちにの解釈は時間がまちまちですが2, 3秒と考えればよいでしょう。

全体的な対応は4月14日の会議後に各都道府県に連絡がある。

